令和元年度
「モラル・エッセイ」コンテスト
優秀作品集

福島県教育委員会

令和元年度　道徳教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【　中学生の部　】

最優秀賞	「大切なもの」	会津学鳳中学校	二年	加藤　碧唯　さん
優秀賞	「私の中の思いやりの芽」	伊達市立桃陵中学校	一年	柳沼　佳奈実　さん
優秀賞	「明るさは私たちの武器だ」	二本松市立二本松第三中学校	三年	守谷　花音　さん

【　高校生の部　】

最優秀賞	『『つながり』について考える」	安達高等学校	二年	根本　有夢　さん
優秀賞	「マナーを守る」	安達高等学校	二年	髙橋　星加　さん
優秀賞	「今生きていることに感謝して」	相馬農業高等学校	三年	青田　美桜　さん

【　一般の部　】

最優秀賞	「今、父として」	郡山市在住	村松　龍　さん
優秀賞	「返ってきた本」	耶麻郡猪苗代町在住	渡部　文子　さん
優秀賞	「御向かいさんの心遣い」	南会津郡南会津町在住	渡部　百枝　さん

大切なもの

会津学鳳中学校
二年　加藤　碧唯

私は、幼い頃から母にお金では買えない大切な物があると言われてきた。最近、その言葉の意味を考えてみた。

私は、よく友達や周りの人から、「一人っ子だから何でも買ってもらえて、食べ物も着る物も一人占めできていいよね。」と言われる。でも、私の母はとても厳しく、「常に物や人を大事にしなさい。」「食べ物も残さず食べなさい。」などとても口うるさい。

私が小学校の時の体操着袋、靴入れ、道具入れ、筆箱は全部母の手作りだった。低学年のうちは全然気にならなかったけど、高学年になるにつれて、その手作り感やリサイクル感をとても恥ずかしく思い、五年生の時に母の手作りの物を持っているのは私だけだったので、キャラクターの付いた筆箱が欲しいと私は母に言った。すると母は、小さい頃に着ていた服を再利用し、その上に私の好きなキャラクターをフェルトで刺しゅうして筆箱を作ってくれた。

私の誕生日、母は私にそれを手渡しながら、「誕生日おめでとう。お金を出せば何でも買えるけど、この筆箱はママの手作りだから世界に一つしかないよ。」と言って、私が喜ぶ姿を待っているかのように笑顔だったことを覚えている。私も包みを開けた時、心の中で「すごい上手、かわいい。」と感動して、すごくうれしかったが素直に喜べずにいた。そして、その日、祖父は私に手紙を届けに来た。開けてみると、メモ用紙のようなものに、「あお、たんじょうびおめでとう。じい」と書いてあった。祖父は八十才を過ぎてからはほとんど字も書けなくなり、何を書くにも母に頼んでいるのに、私のために一生懸命書いてくれたのだ。その姿を想像したら涙がポロポロこぼれ落ち、うれしくてたまらなかったことを今もはっきり覚えている。母の愛情たっぷりの筆箱も祖父の手紙も、私にとってはお金では絶対買えない大切なものだと今、はっきり言える。そして、父・母・大好きな祖父は私の大切な宝物だ。

私の中の思いやりの芽

伊達市立桃陵中学校
一年　柳沼　佳奈実

「私って本当に自分勝手で思いやりがないなあ・・・。」

すぐ怒るし冷たい態度をとってしまう。こんな自分が嫌で嫌いになりそう。

ある日、私は母に、日頃の自分に対する腹立たしさを打ち明けました。すると、母から意外な答えが返ってきました。

「佳奈実は、ばあちゃんに対してすごく思いやりがあるよ。ママだったらいらいらしてしまうばあちゃんの話をずっと聞いてあげているじゃない。いつも感心しているよ。」

そう言えばそうだ。短気な私なのに、認知症の祖母に対しては優しく接しているかなと、私も思いました。

祖母は自分が話した内容を忘れてしまい、同じ話を何度もくり返します。私が尋ねると、「佳奈実が生まれた時、じいちゃんがとても喜んで、ばんざい、ばんざいと何回も大声で言っていたんだよ。」という思い出話を十数回繰り返します。またある時は、私に緑茶をいれてくれながら、「じいちゃんが亡くなってばあちゃんは一人になってさみしい。自分も早く死にたい。」となげいて、さめざめと泣きます。

私はばあちゃんが何回同じことを言っても、「ああそうなんだ。ふうん。うんうん。」などと言いながら、話を聞いています。

私の母が同じ話を何度もしたら、私はきっといらいらしてしまうと思います。どうして祖母には怒りたくならないのか改めて考えてみました。それは祖母が苦労して生きてきた八十年の重みを感じて、「ばあちゃんは一生懸命私に話してくれているんだから私も本気で聞いてあげたい。」と思うからでした。

私の中にも思いやりの芽がちゃんとあるんだなと、自分のことを認めてあげたい気持ちになりました。クールダウンするためにその場を離れる母の代わりに、これからも私が祖母の話を聞いてあげたいと思います。そして、祖母を笑顔にしてあげるのと同時に、私自身も自分の中の思いやりの芽を大きく育てたいです。

明るさは私たちの武器だ

二本松市立二本松第三中学校

三年　守谷　花音

私たちいとこ五人は、誰にも負けないくらい仲が良いので、機会があるたびに集まり、食事会をします。集合の号令をかけるのは、いつも百パーセント元気な御年七十八歳の（六十代にしか見えない）祖母です。正月の餅つき、ひな祭り、それぞれの誕生日、夏祭りに秋祭り、クリスマスに大晦日・・・。そのたびに祖母が、テーブルいっぱいの、色とりどりのごちそうを用意してくれます。それはそれは、魔法使いのなせる技、もちろん全て祖母の手作りです。祖父は、祖母に全ての発言権を譲ったのか、奪われたのか、いつも笑顔で私たちを見守るだけで、ほとんど声は聞こえません。御年八十三歳の（七十代にしか見えない）祖父のささやかな趣味は、コンパクトカメラで撮る写真。祖父のカメラの中は、私たち、孫の写真でいっぱいです。

今年、「明日から令和！」の平成最後の日も号令がかかり、祖父母の家に大集合。私たちいとこは「平成」「令和」の額を手に、素晴らしい料理と共に、祖父母とパチリ、記念写真。これまた大騒ぎ、大笑いの一日でした。

しかし、こんなにぎやかな私たちも、お互いの家を訪れる時は、きちんとあいさつ。帰り際には全員が正座し手をついて、

「ごちそうさまでした。おいしかったです。」

「また来てね。楽しかったよ。」

など、必ずきちんとあいさつをします。

「時代が変わっても、大切なことは変わらないよ。あいさつも、笑顔も、優しさや感謝の心もね。礼儀正しくするんだよ。」

という、祖父母の思いは、両親や伯父たちにつながり、今、私たちにバトンタッチされています。

これから、私やいとこたちも、それぞれの道でつまずくことがあるかもしれませんが、笑顔あふれる私たちにはきっと、「乗り越える力がある。」私は強くそう思います。

「明るさは、私たちの武器だ！」と。

「つながり」について考える

安達高等学校
二年　根本　有夢

私は毎日、自分が暮らしていない他の町にある高校へ通っている。そのため、入学してすぐの頃は、違う町の慣れない景色に戸惑いや不安もあった。しかし、今、新しい町の人々との「つながり」によって、私は楽しく学校生活を過ごすことができている。

最初に、私がこの町とのつながりを感じたのは制服を購入した服屋さんだった。まだ入学前だった私に優しく話しかけてくださり、「困ったらいつでもおいで。傘を忘れたら貸してあげるよ。」と言われて、とてもうれしくなったことを覚えている。このようにこの町の人々はみんな、地域の隔たりもなく優しく見守り、手助けしてくれる。強い絆があるのだ。

それは、地域の人々だけではない。私が通っている高校の地元の同級生や先輩、先生方も同じだ。この町の観光名所や有名なお店を教えてくれたりして、実際に一緒に訪ねたりもした。また、ボランティア活動では地域をきれいにして、いつもお世話になっている恩返しができて、とても幸せな気分になった。

そして、一番驚いたのは「祭り」を通しての人々のつながりだった。この町には全国でも有名な大きな祭りがある。その祭りの運営やみこし、太鼓台等の大部分を、地域の子どもたちも協力して行っていた。昨年初めて見た時、子どもたちも大人の方々と同じように自分の町の伝統行事を誇りに思い、一体となって盛り上げていく姿に感動した。

新しい町の人々のおかげで今は不安が無くなり、この町が大好きになった。きっと、この素晴らしい「つながり」たちがなかったら、ここまで楽しく高校生活を送ることはできていないと思う。

私が伝えたいことは、今の時代はなかなか地域全体で交流する機会がなく、人と人との温かい関係も少なくなってしまっているということだ。しかし、私はこの町でたくさんの人の温かさに触れることができた。きっとこのような機会が増えれば、もっと活気ある町にできるはずなのだ。

マナーを守る

安達高等学校
二年　髙橋　星加

私たちの身の回りには、数多くのマナーがある。

例えば、食事の際のテーブルマナーやビジネスマナーなどから、「電車内や公共の場では携帯電話やスマホをマナーモードに設定する」「列への割り込みをしない」「ゴミの回収日を守る」など、マナーを遵守しなければ、周囲の人の迷惑になるものもある。また、このマナーは国や民族、文化、時代、宗教などの様々な習慣によって変わってくる。

そんな中で私は、「海外からの観光客、外国人はマナーを守らない。」というのを耳にし、違和感とともに疑問を持った。日本独特のマナーでもしっかり守っている外国の方はたくさんいる。そういう日本人こそ自国のマナーを守れているのだろうかと。

私は日本人こそマナーを守る意識が低くなっていると感じる。駐車場ではない所に車を停めたり、健常者が思いやり駐車場に車を停めていたりするのをよく目にするからだ。そんな私たちが外国の方々に「マナーを守ってください」とは言えないと思う。

マナーの意味を辞書で調べてみると「態度。礼儀作法。」の他に「自分とみんなのための立ち振る舞い、生活の仕方のこと。」とあった。たしかに、マナーを破ったとしても罪にはならないし、直接的に自分に害はない。逆に楽ができるのかもしれない。しかし、あなた一人が楽をすることで何人もの人が被害を被っている。マナーを破って楽をする人のためにマナーがあるのではなく、そのマナーを必要としている人や、みんなが生活を豊かにするためにマナーがあるのだ。

二〇二〇年のオリンピックで海外から多くの人が来日する今だからこそ、今一度マナーの重要性を再確認し、私たち一人一人が意識して守っていくべきだと思う。そして、その姿から外国の方々にも日本の「心遣い」「気遣い」からのマナーを知ってもらいたい。

今生きていることに感謝して

相馬農業高等学校

三年　青田　美桜

今から八年前、あの大震災によって、私の生活は一変しました。震災当時、私は小学校三年生でした。大きな揺れが起きた時、何が起きたか全くわからず、その場にしゃがみ込んで、揺れが収まるのを待つことしかできませんでした。そして、揺れが収まった瞬間に、泣き出してしまったことを今でも覚えています。

「怖い、早く家に帰りたい。」

そんな気持ちでいっぱいでした。その後の記憶は曖昧で、次の日はわけもわからず、祖父母と両親、兄、私、妹の家族七人で新潟県に避難しました。

四月、私は避難先にあった小学校に転校しました。初めての場所、初めての転校、うれしさや楽しさは全くなく、ただただ不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、教室に入り、おどおどしている私に、クラスメイトの人たちはたくさん話しかけてくれました。学校のこと、クラスの友達のこと、近くにある面白いお店・・・、知らないことばかりの私を色々な場所に自転車を漕いで連れていってくれました。その時には不安な気持ちは、どこかへ消えていました。クラスメイトと一緒になって笑って、とても楽しい毎日になっていきました。

しかし、そんな日々は続きませんでした。ちょっとした口喧嘩でした。

「私のお母さんが言ってたんだ。『放射能』と言うあぶないものが付いてるから近づいちゃだめだって。」

私は、友達に言われたことがよく分かりませんでした。けれど、「多分、私が地元の出身ではないからだ。」ということは分かりました。分かった瞬間涙が止まりませんでした。家に帰り、母は、

「そうかもしれない。でも、今生きてることに感謝して、一生懸命頑張るしかないの。」

と言いました。母のその言葉を今でも覚えています。

もしかしたら私は、あの大震災で死んでいたかもしれません。だからこそ、今をしっかり生きる大切さを身にしみて感じています。

今、父として

郡山市在住
村松　龍

亡くなった父と同じ年齢になった。

当時、小学校四年生の私と一年生の妹は、突然おそった父の死というものをはっきりと理解できなかったのだろう。ぼんやりと覚えていることは、母の泣いている姿と二人の小さな体を強く抱きしめる震える手だった。父は家族、そして子どもたちに大きな愛をそそいでくれた。仕事がとても忙しかったにもかかわらず、いつも子どもたちと触れ合い、その日にあったできごとをうれしそうに聴いてくれた。あの日も朝食を食べながら、「今日は学校で何があるんだい。」「気をつけて行くんだよ。」といつもと変わらず優しく語りかけてくれた。その日の夜に二度と父と話すことができなくなるとは考えてもいなかった。

父は幼い私に対して、「生まれてきてくれてありがとう。」と頻繁に話していたことを思い出す。晩婚だった父はことさら子どもに愛情をそそいだという理由だけでなく、幼くして戦争で父を（私の祖父）を亡くしていたこともあり、父子のかかわりを本当に大切にしていたことを後に母から聞いた。

今、自分が父となり、幼い我が子への愛おしさを感じるとき、亡くなった父が私にそそいでくれた大きな愛について考える。こんな風に我が子を愛し、健やかな成長を願っていたことを。自分の父への畏敬の念と父親としての理想の姿を。父から子へ、そして、さらにまた子へ愛情や願いが受け継がれていくことを。

あのころの父が将来を思い描いたような人間になっているだろうか。自分の父のような父親になれるだろうか。生まれ育ったふるさとで教員となった今、目の前の幼い我が子に視線を向けながら繰り返し考える。そして、この子と共に成長していきたいと強く感じる。

今、父として無邪気に微笑む幼い我が子へ語りかける。

「生まれてきてくれてありがとう。」

返ってきた本

耶麻郡猪苗代町在住
渡部　文子

二年前の夏、私は学生時代の友達に会うため、図書館から借りた本を片手に東京に向かいました。降車する前、荷物の中に本を確かにしまったはずでした。その後は予定通り友達と会い、その夜お世話になる息子の家へと向かったのです。次の日、そろそろ帰る支度をしていると、

「あれ、無い。車の中に落としたかな。どこかにもぐり込んでしまったのかな。」

車の中を探しましたがどこにもありません。不安を抱えたまま我が家に帰り、後は息子に探してもらうことになりました。

町の図書館でボランティアをしている私は東京から帰ってきた次の日、ボランティアの打ち合わせのため図書館へ行きました。私が借りていた本の事情を打ち明けました。そんな話をして間もなくのことです。図書館宛に小包が届いたのです。職員の方は「自費出版の寄贈本かな」と思い開封したそうです。ですが、その時

「文子さん、本返ってきたよ。」とはずんだ声が聞こえました。

「えっ。本が返ってきた。」そうなのです。私がなくした本が再び私の手に戻ってきたのです。その場にいたみんなから歓声の声が…。信じられませんでした。差出人を見ると福島市在住の女性の方でした。すぐに連絡を取りお礼を申し上げました。詳しく聞いてみると、本は東京駅の新幹線のホームで拾ったそうです。同郷の福島県内の図書館の本だと知り、東京駅に落とし物として届けた方がいいか迷ったそうですが、そのまま持ち帰り福島に戻られると、すぐに図書館宛に送ってくれたのです。そのような行動に移してくれたのです。

私の借りた「本」は、私以上に冒険をした夏だったことは言うまでもありません。不注意だった私の手元に、その二日後、その本は戻ってきました。こんな奇跡って起こるのですね。本とともに人の「心」まで届けていただけたような気がしました。

「ありがとうございました。すてきな心を。」

御向かいさんの心遣い

南会津郡南会津町在住
渡部　百枝

先日、実家に帰ったときのことです。その日は小名浜の花火大会が行われる日でした。実家には車が一台しか止められないので、私の車は、仕方なく道路にはみ出して置いておくことにしたのです。しばらくすると玄関のチャイムが鳴り、出てみると、御向かいに住んでいる方が立っていました。

「今日は、花火大会で車が多いから、ぶつけられると大変ですよ。よかったら、うちの駐車場が空いているから止めておいていいですよ。」

と言いに来てくれたのでした。私は、丁寧にお礼を言って、その言葉に甘えさせてもらいました。おかげでその日は車のことを気にすることなく、安心して滞在できました。

御向かいに住んでいる方は、八年前の大震災で原発事故の被害を受け、富岡町から移住した方でした。私の両親は、大震災で津波の被害を受けて家を無くし、豊間から妹が住んでいる小名浜に家を建てて暮らしているのです。大震災が起きる前は、近所付き合いが頻繁で、近所の人たちといろいろな交流のあった両親でしたが、新しい土地に住むようになってからは全く新しい環境での生活となってしまいました。

隣や向かいに住んでいる人が誰なのか分からないで暮らしていることが多くなった現在、さりげなく困った時に手を差し伸べてくれた御向かいさんの心遣いに心が温かくなりました。

『困った時はお互い様』の心を改めて感じさせてくれた御向かいさん。そういう心がたくさん広がっていく社会になるといいなと思い、御向かいさんに感謝しながら、私は帰路につきました。

高齢になった両親が新しい土地で暮らすことを心配していましたが、素晴らしい方に出会うことができて、とてもうれしくなったと同時に、これからもよいお付き合いができることを願っています。

ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.